

鯨 研 通 信



第388号

1995年12月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104 東京都中央区豊海町 4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)

南極海における鯨類捕獲調査活動の実際

西 脇 茂 利 (日本鯨類研究所)

はじめに

国際捕鯨取締条約第8条に従って、日本政府が日本鯨類研究所に委託して実施している南極海ミンクジラの捕獲調査 (JARPA と略称する) は、1987/88年及び1988/89年にそれぞれ第IV区 (東経70-130度) 及びV区 (東経130度-西経170度) の一部の海域において実施された、調査理論の実行可能性を探る予備調査を踏まえて、1989/90年から本格調査が第IV区及びV区の全域においてこれまでに継続して実施されている。計画では第IV区及びV区を1年毎に交互に調査を実施することになっており、1994/95年までにそれぞれの調査海区で3回の本格的調査を終えた。JARPA は、これまでに数回、調査中に過激な反捕鯨団体から直接妨害を受けた。国際鯨類調査10ヶ年計画 (IDCR) の下で、IWCにより1978/79年から実施されている南半球産ミンクジラ目視調査航海もまた、非致死的研究にも関わらず、それが商業捕鯨の再開につながるということで、反捕鯨団体の非難や妨害を受けた。致死的研究、非致死的研究を問わず、南極海における鯨類を対象とする調査は、多かれ少なかれ反捕鯨団体の非難と妨害を受ける立場にあると言える。

筆者のように、これまでこれらの鯨類調査の実際に携わってきた者として自負していることは、日本が実施しているJARPAは、非致死的研究を有効に利用しながら致死的研究を実施していることである。捕獲に伴うだけで疑似商業捕鯨とみなされるのは誠に遺憾に思う。この捕獲調査はIDCRによる非致死的研究な鯨類目視調査と商業捕鯨時代に行われていた生物調査の経験の柱に、南極海における鯨類の有効利用と資源管理のために、綿密に立案、実施されている。これらの調

査から得られたデータの解析により、商業捕鯨時代には得られなかった、ミンクジラの合理的資源管理に関連する多くの興味ある生態学的知見が解明されつつあり、また、計画時には予想されなかった問題も、データの解析結果から次々に生じ、調査方法の改良が毎年行われている事実は意外に知られていない。これから紹介するように、商業捕鯨と捕獲調査の活動の比較を通して、JARPAにおける致死的研究及び非致死的研究の実態と重要性を理解していただければ幸いである。

調査海域と捕鯨漁場

JARPAが調査海域として選定した南極海第IV区及びV区は、かつての商業捕鯨時代に日本がミンクジラの主漁場としていた海域である。商業捕鯨の場合は、効率よく操業し、高い生産量を上げるために、大型のミンクジラが濃密に分布する好漁場を探しながら、船団は氷縁に沿っての狭い海域を移動する。これに対してJARPAでは、資源の分布と構造の実態を把握するため、沖合から氷縁までの広い海域を、定められた航跡に従って調査し、小さい個体から大きい個体まで無作為に標本鯨を採集する。'調査海域' と '漁場' という語彙の違いが、その活動の違いとなって表される。商業捕鯨では捕獲活動に大半の操業時間が費やされるが、捕獲調査では鯨群の探索活動に大半の調査時間が占められる。商業捕鯨により氷縁にミンクジラが集中して分布することが、また、IDCRによって氷縁の沖合にもミンクジラが広く分布することが、理解され、これらの知見を基にして、JARPAにおいては、広い調査海域内で無作為抽出法 (ランダムサンプリング)

グ)によって偏りのない標本を採集するように設計されている。資源密度の分布を調べ、標本を無作為に採集するために、JARPAではIDCRで採用されているジグザク方式の調査コースを採用している(図1)。ミンククジラの密度分布にかかわらず調査海域を広範囲にわたって均等に探索努力が払われるように、調査日数と海域の面積を考慮して調査点の間隔を決定し、調査コースが設計される。

標本採集と商業捕獲

JARPAの採集標本数は、南半球産通常型のミンククジラ300個体を基準とし、±10%の許容範囲を設定している。従って最大標本数は330個体となる。南極海で商業捕鯨が終了した1986/87年漁期の捕獲頭数は、異議申し立ての下で日ソが自主規制を行い、日本は1,941頭、ソ連は3,028頭を捕獲した。鯨を捕獲するという行為は捕獲調査も商業捕鯨も変わらないが、捕獲活動のプロセスは大きく異なる。商業捕鯨の場合は、捕獲効率を考慮し、高密度海域で大きな鯨を選んで捕獲する。これに対して捕獲調査では、広い調査海域に設定した調査コース上で発見されたミンククジラの群の中から、ランダムサンプリングにより選ばれた鯨を捕獲する。

商業捕鯨では捕獲効率が優先し、捕獲しにくい鯨は放棄したが、捕獲調査では調査員によって無作為に選ばれた鯨の捕獲の放棄は、資料の不確実性を増大させ、その後の解析に重大な影響を与えることになるので、極力避ける。やむを得ず放棄する場合には、その鯨の行動観察等についての標本採集船からの報告に基づき、調査団長が判断し、放棄に至る経緯が詳細に記録される。また、高密度海域における標本採集の際に、1群おきに採集の対象とする等の変更を行う場合があり、この変更の指示も調査団長が行う。この指示に際しては、ランダムサンプリングの確保と他の調査海域との格差を最小限にとどめることに考慮が払われる。従って捕獲調査の捕獲活動においては、標本個体の捕獲に費やされる時間は商業捕鯨よりもはるかに長くなる。実際に1頭の鯨標本を採集するために3時間以上をかけた例もみられる。

捕獲調査の場合、分布密度の低い海域からの鯨体標本の採集が捕獲調査の成功の鍵を握ると言えよう。しかしながら、鯨を捕る調査船側と捕ってもらう調査側とでは、無作為抽出する方法に関して、意見の食い違いが見られる場合もある。鯨群を発見し、それがミン

ククジラであると確認し、最初に射程距離に入った個体を捕獲すれば、それが無作為抽出といえるのではないかという船側の意見もあるが、この場合捕りやすい鯨が採集されることになるので、標本に偏りが生じる。商業捕鯨では効率よく多数の鯨を捕獲することに捕獲活動が集約されたが、捕獲調査では、ランダムに標本採集の対象に選ばれた鯨を確実に捕獲することに集約される。これまで8回の捕獲調査において無作為に抽出されてそれが採集できなかった標本数は、全採集標本数の3%に満たない。この結果はJARPAにおいては、厳密にランダムサンプリングが実施されていることを証明している。

探鯨方法の相違

探鯨の仕方については、捕獲調査も商業捕鯨も差はない。しかしながら商業捕鯨の場合は、氷緑の位置や水温、潮目等の海洋情報及びオキアミとミンククジラの分布状況を把握しながら、操業に適した漁場を探索することを優先する。これに対して捕獲調査の場合には、そのような情報を考慮することなく、あらかじめ設定された調査コース上に分布する全ての鯨を、群の大小、鯨体の大きさ及び分布密度の違いに関係なく、発見するように努める。

調査コース上の鯨の見落としは、解析結果に大きく影響する。鯨の分布密度が薄い海域における長時間の探鯨は非常に疲れ、注意が散漫になり、鯨の見落とす危険性が高くなる。筆者はIDCRに参加した際に、日本と旧ソ連の捕鯨船に乗船する機会に恵まれたが、ソ連と比較して、日本の捕鯨船の探鯨能力は格段に高かった。商業捕鯨に比べてはるかに分布密度の薄い海域で長時間探索する、調査船乗組員の集中力とそれを持続させる気力には、いつもながら頭が下がる。目視調査の精度は捕鯨船船員の能力と努力によるところが大きい。

また、IDCRとJARPAが回を重ねるにつれて、乗組員の鯨の発見能力の向上に加え、鯨種を識別する能力が向上した。JARPAの結果、調査海域には通常型ミンククジラの他に矮小型ミンククジラ(ドワーフミンククジラ)の分布することが確認されるようになった。商業捕鯨とは異なって、JARPAの調査海域は南緯60度まで広がっていることにもよるが、洋上で亜種の識別を行うことは普通は極めて難しい。JARPAにおいてランダムサンプリングの方式により、ドワーフミンククジラを採集する機会に恵まれ、洋上での十分

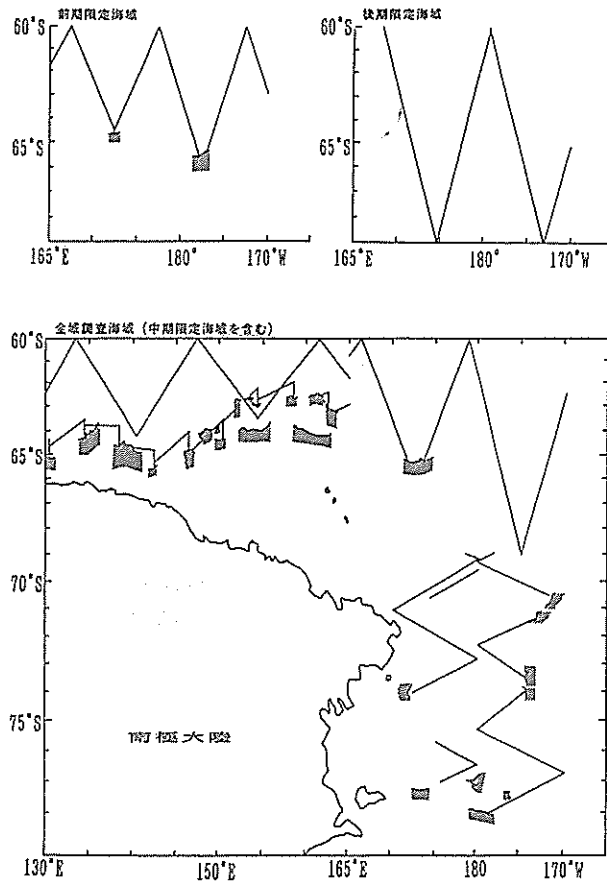


図1 1994/1995年南半球産ミンクジラ捕獲調査における調査コース（メインコース）
（上図：前期・後期限定海域調査、下図：全域調査）

な形態と行動の観察を行った結果、現在ではドワーフミンクジラは、追尾中に普通型ミンクジラと識別ができるようになり、最近では標本採集対象からはずしている。また、商業捕鯨時代には捕鯨船の乗組員には俗称でしか呼ばれなかった鯨達も、最近では標準和名で識別されるようになり、商業捕鯨時代にはほとんど知られていなかった鯨種の南極海での分布や資源の実態が明らかになりつつある。その結果、アカボウクジラ科鯨類の仲間であるミナミトックリクジラは南極海生態系の構成要素として、極めて大きな部分を占めており、この鯨種の存在を無視しては、南極海生態系の中での鯨類の果たす役割を正しく理解できないことが認識されるようになった。

捕獲と標本鯨の採取

商業捕鯨では、短期間に限られた捕獲枠内で最大の生産を上げるために、鯨の分布密度が高い海域で、できるかぎり大きなミンクジラを捕獲の対象にしていた。また、分布密度が小さいと捕獲効率が悪く、小さな鯨が多いので、そのような海域では操業しなかった。

JARPAでは、調査コースを調査中に発見されたミンクジラのひとつの群れ（1次発見と呼ばれている）に接近し、群れの構成頭数、群内の個体の位置関係及び体長を推定し、群れの各個体に番号を振り、乱数表で捕獲するクジラが選択される。従って体長に関係なく選択された鯨を、確実に採集しなければならない。さらに標本の資源代表性を重視する目的から、1群から1頭のみ採集される。たとえ100頭の群であってもその群れから1頭しか採集されない。また、ミンクジラの集中して分布する南部海域で、そこに留まって

効率よく採集を続けることはできない。一方、鯨の密度が低く、単独群の出現頻度が卓越するので、商業捕鯨では漁場にならなかった北部海域でも調査・採集がなされる。

捕鯨でいうところのコスイ（高速遊泳、長潜水等）鯨が多い海域で標本の無作為抽出を確保するために、標本採集船に過度な負担をかけるのが調査団長の仕事のようになっている。「人に恨まれるようになると、調査団長も1人前」といわれている。しかしながら、この標本採集船の過度の負担は着実に調査の実績につながっている。それは採集される標本の性比、体長組成及び年齢組成等が、商業捕鯨で得られたものと明らかに異なっていることからもうかがえる。

渡鯨の比較

捕獲調査では、採集された鯨はできる限り早く母船に引き渡される。母船における生物調査の進捗状況や標本採集船の調査効率を勘案して、2頭採集してから渡鯨する場合もあるが、概ね1頭採集されたら直ちに母船に引き渡されている。これは母船上で実施される生物調査で、良好な鮮度が要求される試料を採取するためや、多岐にわたる生物調査項目の測定と採集を確実に実施する上で、重要な原則である。商業捕鯨では、1頭毎に渡鯨していたら捕獲効率が悪いので、捕獲に重点を置き、支障のでない時間に渡鯨していた。

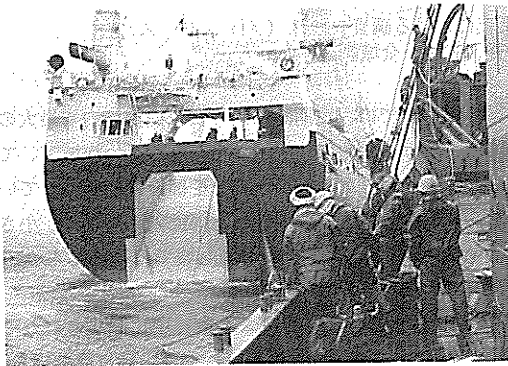


写真1 標本鯨を調査母船に渡す

標本採集船が曳鯨や渡鯨のためのロープを通す穴を捕獲されたクジラの尾鰭にあけることと、尾鰭の裏に標本採集船の略号と捕獲番号をナイフで刻む以外は、鯨体を傷つけることは禁じられている。商業捕鯨時代には初漁のクジラの尾鰭の両端を切ってそれを捕鯨船の神棚に供える習慣があった。捕獲調査に初めて参加された捕鯨船の乗組員が、その習慣を踏襲して、切っ

た尾鰭を神棚に供えたために、母船上でクジラの計測に立ち会った調査員が困惑したことがある。後日、干からびた尾鰭の両端が母船上で慎重に計測された。また、シャーベットアイスの中を曳航したために、黒い表皮が氷に削られて、真っ白になってしまったクジラを渡鯨して、生物首席調査員から叱責されたこともある。氷でクジラの皮が剥げてしまっても、商業捕鯨時代ではなんともなかったことである。

商業捕鯨では捕獲しなかった小さい個体も、ランダムサンプリングが鉄則の捕獲調査では無理してでも捕獲しなければならない。JARPAでは小さな個体が曳・渡鯨中に流出することをさけるために、銹傷にロープを通し捕縛する方法も開発された。標本採集船の活動が円滑に実施されるように調査母船が支援し、渡鯨の時間を節約できるように、効率的に航走するようになった。

精密な調査と採集がなされる捕獲調査の性格から、商業捕鯨時代にみられたように、捕獲したクジラが山のように母船のデッキに置かれ、解剖を待っているという状態はJARPAではなく、母船上で実施される生物調査の進行に注意を払いつつ、迅速かつ円滑に調査活動を進めさせるための渡鯨のタイミングの調整がなされている。渡鯨に関しても、商業捕鯨と捕獲調査とは、このように活動形態が大きく異なっている。

生物調査と解剖

捕獲調査で行われている鯨体解剖は、母船上で行われる生物調査の流れに組み込まれる形で行われている。商業捕鯨におけるミンククジラ1頭の、母船上での解剖の所用時間は、必要な生物調査が行われても、15分程度であった。これに対して、JARPAにおける鯨体解剖は少なくともその3倍の時間を費やしている。JARPAの母船上での調査は、測定項目19種、標本採集項目32種の多岐にわたっているために、調査時間がかかることは否めない。一方、採集する試料には鮮度がよいことが要求され、処理に長い時間をかけることはできない。商業捕鯨時代の解剖に比べれば、JARPAはかなりの時間をかけていることになるが、8年の調査経験の積み重ねと、甲板部の解剖担当乗組員と調査員との息があってきて、最近ではスムーズに調査をこなせるようになった。

しかしながら、経験の少ない調査員を毎年乗船させるために、調査において甲板部に色々ご迷惑をかけているのも事実である。10トン近い動物を解剖する



写真2 調査母船上での生物調査

ので、太いワイヤーと大きな肉塊がデッキ上を縦横無尽に動き回り、不測の事故がいつ起こっても不思議ではない状態で生物調査が行われる。研究者という生き物は不思議なもので、自分の興味が惹かれるものが現れると、そこが母船上か研究室なのか、わからなくなってしまうことがある。ベテランの解剖担当者は、背中に目を持ってるといふ表現をされるが、彼らの気遣いのおかげで、これまで大きな事故もなく調査が行われていることには、何時も心から感謝している。

人道的捕殺関連調査

標本鯨の採集状況を調べることにより、致死時間の短縮に貢献する目的から、1993/94年からJARPAにおいて標記の調査が実施されるようになった。この調査は標本採集船での捕殺時と、母船上での解剖時に実施される。標本採集船では、標本鯨の捕獲作業について、銚や電気ジャンスの使用状況を記録する。母船デッキ上では、最初に鯨体表面の銚傷を観察し、上述の標本採集船からの情報に基づき、命中銚の弾道を推定する。また、解剖中は銚による内部組織の損傷について観察し、記録する。母船上で確認できた銚の体内破裂状況は1日の調査終了後に標本採集船に連絡され、採集活動における鯨体の致死時間の短縮に役立っている。

実験と観察

JARPAにおいては、標本鯨の採集活動とは別に、以下のような実験と観察が実施されている。

距離角度推定実験：発見鯨群の船からの角度と距離の推定精度が、資源量推定上の重要な要素である。これらの情報を得るために、鯨体を模したブイを浮か

べ、目視調査船が航走しながら推定実験を行う。この角度と距離は無作為に選ばれ、観察者によって偏りのないように実験が行われる。観察者にとって自分の能力を測られているように思われるが、目的は調査船の持つ傾向を見ることにある。JARPAでは既に8回も実施されていることから、十分に結果が得られたのではないかという意見を頂くこともある。しかし、同型船で、観察者もさほど代わっていないのにも関わらず、調査毎に実験結果が異なっている。従って、我々は調査年毎に実験を行なうことは、資源解析上必要であると考えている。

採集活動影響実験：この実験は、標本鯨の採集活動が併行して実施される目視活動に与える影響について、検討することを目的としている。実験の内容は、追尾しているクジラの周辺で観察される他のクジラの追尾に対する反応（採集活動中のクジラあるいは船に接近するか逃避するか等）を観察することにある。

目視調査におけるクジラの船に対する反応に関しては、IWC科学委員会においても議論されているが、結論が出ていないのが現状である。1985/86年のIDCR航海中に、ヘリコプターを用いてクジラの反応を観察する実験が試みられたが、その時はクジラを発見できず、失敗に終わっている。

採集活動影響実験はミンククジラが高密度に分布する海域で実施されるのが適当であるが、限られた調査日程で通常調査をこなすのに精一杯で、なかなか実験の機会に恵まれないのが現状である。

自然標識（写真撮影）：IDCRと同様に、シロナガスクジラ、ザトウクジラ及びセメクジラを対象にして、個体識別のための写真撮影を実施している。これらの記録は回遊生態の解明に活用されている。

バイオプシースキン採集：自然標識を実施した鯨類を対象にバイオプシースキンの採集を実施している。
シロナガスクジラの行動観察：シロナガスクジラの潜水及び遊泳行動を解析するために、調査中に発見された個体及び群れの浮上時の行動を観察する。

アカボウクジラ科鯨類の行動観察：アカボウクジラ科鯨類、特にミナミトックリクジラ、は南極海生態系の構成要素として大きな部分を占めていることが認識されている。将来この科の鯨類の標本採集の可能性の検討を目的として、鯨種の判定、船に対する反応、発見から接近までのクジラの行動を観察する。

その他の実験：ミンクジラの回遊の解明と系統群判別を目的として、遊泳するミンククジラへの人工衛星標識システムを開発するために、南極海においてフ

ールドテストを行っている。また、クジラの分布に関連して、将来実施を予定しているオキアミ分布調査に用いる音響機器のクジラへの影響を評価する実験を試みている。

結びに一南極海鯨類サンクチュアリーの見直しと環境調査の拡充

南極海に鯨類サンクチュアリーが設定されると、インド洋サンクチュアリーのように、科学調査は殆ど行われなくなる恐れがある。日本の捕獲調査活動の継続による資試料の蓄積は、将来の捕鯨再開の際に、有効

な資源管理方式を導くことは間違いない。鯨類資源のモニタリングのみならず、環境変化が鯨類資源に与える影響に関するモニタリングのためにも、日本の実施しているJARPAの調査は重要である。

捕獲調査においては、種々の組織標本の採集や海洋観測等の環境調査を継続的に実施している。環境変化のモニタリングに関して、目視調査による各種鯨類の分布の実態の把握に努めるとともに、代謝、摂餌生態、海洋環境等の生物学、生化学、物理学、化学の種々の側面から資試料を得ることが、JARPAの南極海環境調査の拡充になるであろう。

ストランディングレコードから見た 日本沿岸の鯨類の生態（Ⅱ）

石 川 創（日本鯨類研究所）

本誌387号に引き続き、鯨種別のストランディングレコードの特徴を解説する。

（9）カマイルカ

後述のスナメリに次いで記録が多く、特に混獲例が多いのがこの種の特徴である。記録を月別に見ると、太平洋側も日本海側もはっきりした季節性を示すことがわかる（図4）。漂着、混獲を問わずカマイルカの記録は1～5月に集中し、その前後の12月、6月には件数が激減し、7～11月には記録がなくなっている。ただしまったく夏に記録がないわけではなく、1例だけがオホーツク海側では7月に漂着が記録されている。

日本海側では、京都府、新潟県、石川県、福井県の順に多く、時期的にも1～5月に集中するが、各県に占める混獲/漂着の割合は大きく異なる。例えば京都府と福井県の記録は計58件で、ほとんどが若狭湾内の定置網での混獲だが、石川県、新潟県の記録中に占める混獲は前者が23件中9件、後者は26件中3件にすぎない。新潟県の場合、他鯨種を含めた新潟県における混獲記録の79%が佐渡島に集中している。この点を考えると、カマイルカは沖合いの佐渡を通らず、本州の沿岸沿いに集中的に分布していることも考えられ

る。太平洋側では千葉県で14件が最も多く和歌山県以西の記録はない。やはり1～5月に記録が集中している。

日本近海のカマイルカの季節的な分布・移動は現在の所完全にはわかっていないが、調査船を用いた目視調査から少なくとも日本海側のカマイルカは夏期には

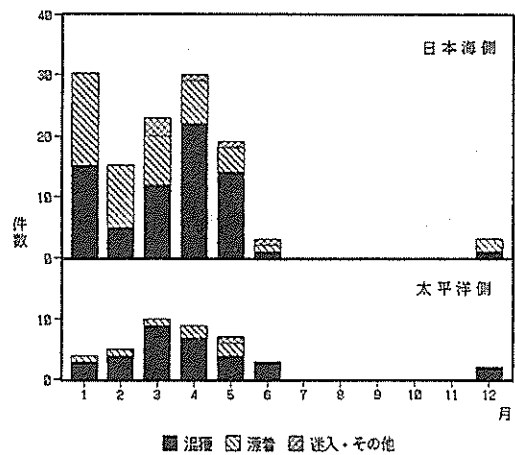


図4 太平洋側及び日本海側におけるカマイルカのストランディングレコードの状況別季節推移

北上して北海道沿岸まで達していると考えられている³²⁾。夏期のカマイルカのストランディングレコードは極めて少ないが、7件ある青森県及び北海道の記録のうち5件が6~7月で、5月末と11月が各1件である。著者自身の経験でも、8月に噴火湾沿岸でカマイルカの群れを多数目撃しており、別の年の8月にはオホーツク海数マイル沖で数百頭の大群に遭遇している。青森県近海のイルカ類の分布調査の結果³³⁾では、カマイルカは日本海側では5~7月、太平洋側では7~9月に頻繁に出現し、津軽海峡では場所によって両者の特徴が出ており、カマイルカの海峡の通行を示唆している。太平洋側での夏期の分布は、前述の目視調査でも7~8月に銚子以北で発見が記録されている³²⁾。他、銚子沖10~30kmでカマイルカを中心としたホエール・ウォッチングが7月から始まっている³⁴⁾。銚子以南のストランディングレコードが冬期~春期に偏っている点を考えると、太平洋側のカマイルカも日本海側と同様に夏期に沿岸を北上していると思われる。Miyazakiら(1991)は、頭骨の形態から日本海-オホーツク海、峇岐、西部北太平洋の3つの系統群の存在を示唆している³⁵⁾。ストランディングレコードからは系統群の判定は出来ないが、これらの情報を総合すると、日本海側では冬に若狭湾~新潟沿岸に現れたカマイルカ(日本海-オホーツク海系群?)が青森~北海道、さらにはオホーツク海に至り、また太平洋側では紀伊半島~房総半島沿岸に冬に現れたカマイルカ(西部太平洋系群?)が、北上あるいは沖合いに移動するのではないかと推測される。日本海西部から東シナ海にかけてのカマイルカ(峇岐系群?)のストランディングレコードは福岡県、長崎県で12~2月のみ(計4件)で、冬だけに記録されている。

(10) マイルカ

温帯及び熱帯性の種で日本近海では九州南部と沖縄に多いとされる³⁶⁾が、23件の記録にこれらの地域は含まれず、日本海側が17件を占めている。データの数が少なくはっきりしないが、太平洋側は11~4月にのみ記録があるのに対し、日本海側は6月に5件、12~2月に7件と、初夏と冬に2つのピークがあるように見える。何らかの季節的な移動が考えられるが、記録の北限である新潟県で2月(2件)と6~7月(5件)の異なる季節に記録がある一方、日本海西部の島根県では8月、長崎県では11月と1月に各1件記録があり、前述のカマイルカのような季節的な分布海域の変化が見られない。また2月の新潟県近海の表層水温³⁷⁾は、マイ

ルカの好む水温の下限とされる10℃¹³⁾を下回っているにもかかわらず分布していることになる。津軽海峡における目視調査では、マイルカは5~6月に頻繁に観察され、7~8月に姿を消しており³⁸⁾、これらのマイルカの真夏の分布については情報が無い。一つの仮説として、日本海のマイルカは冬期は低水温にかかわらず広範囲に分布しているが、夏期になると沿岸を北上し、従来分布域とされていない高緯度まで移動していることが考えられる。初夏の記録のピークはマイルカが沿岸を移動するため、冬の記録のピークは低水温の環境で生存条件が厳しくなるからであろう。この根拠として、日本海側の記録17件のうち混獲及び迷入の7件の記録が5~11月の春~秋に限定されており、この時期に沿岸での分布を示唆しているのに対し、12~4月の8件の冬期の記録はすべて漂着(うち3件は生存)で、自然死を示唆していることがあげられる。太平洋側については記録が少なく夏期の分布については推定不能であるが、カマイルカのように北上するか、より沖合いに移動していることが考えられる。定期船、公庁船を利用した目視調査では、7~9月に北海道太平洋沖で発見されている³²⁾が、目視調査船の記録ではないので鯨種判定の精度についてはやや難点がある。

沖合いではしばしば数千頭の群れを作ることが知られているが、漂着も混獲もほとんどが単独例である。混獲では1月に高知県安芸町で地引き網で100頭以上が混獲された例が最多の記録で³⁹⁾、漂着、迷入では12月に東京都の隅田川に4頭が迷入した後に座礁した例がある⁴⁰⁾。

(11) バンドウイルカ

27件の記録の分布は日本海側、太平洋側ともに12件ずつで差がなく、季節的な特徴も見られない。北海道から鹿児島まで記録があるが、県別では日本海側の京都府、太平洋側の三重県が各6件で最も多い。混獲が15件で半数以上を占め、漂着が4件と少ないのに対し迷入は7件と多い。33頭のマス・ストランディングが奄美大島で10月に記録されている⁴¹⁾が、これを除く漂着の4件のうち生存漂着(座礁)が確認されたのは1件で、迷入が多い割に生存漂着(座礁)が少ない。基本的に沿岸性と考えられ、飼育環境やストレスに強いと言われるバンドウイルカの性質と関係があるのかも知れない。近年熊本県の通詞島や東京都の御蔵島など、沿岸定住型のバンドウイルカの観察や生態の研究が始まっており、これまでにない長期的な生態の観察による成

果が期待される。

(12) マダライルカ

基本的に外洋性、熱帯性のマダライルカは沖縄県の記録が最も多く（4件）、日本海側での記録はない。混獲例はなく、11件中6件を迷入が占めており、東京湾の運河に4頭が迷入した例⁴²⁾が最北の記録である。7～8月の夏の記録がなく、この傾向は温暖な沖縄県の記録を除くとさらにはっきりして、10月～4月のみにストラディングが発生している。後述のスジイルカとともに、マダライルカは日本近海では黒潮の暖海水が冷海水域に突出する海域に集中し、駿河湾や紀伊半島沖では春と冬に漁業捕獲がピークに達する⁴³⁾。換言すれば外洋性のこの種が最も太平洋沿岸に接近する時期とも言えるだろう。性の判別した8件の記録中6件は単独の雌であったが、東京湾で迷入した4頭の例ではすべて雄だった。

(13) スジイルカ

スジイルカはマダライルカの近縁種で、やはり熱帯外洋性の種である。ストラディングレコードは10件と少なくすべて太平洋側で、県別では千葉県が6件で最も多く、他に三重県（2件）、愛知県、和歌山県（各1件）に記録がある。これは目視調査による日本近海のスジイルカの分布⁴⁴⁾とほぼ一致している。マダライルカよりやや低水温域に分布するが、同様に黒潮の暖海水が冷海水域に突出する海域に集中し、春と冬に漁業捕獲がピークに達する点は同じである⁴³⁾。しかしストラディングには季節的な特徴は見られず、夏でも記録がある点でマダライルカと異なる。記録数が少ないため今後の記録の集積と解析が必要だが、あるいは夏期の両種の棲み分けがあるのかも知れない。

ストラディングの形態は9件が漂着、1件が迷入で混獲例はない。生死の判明した9件中8件が生存漂着で、極めて漂着時の生存率が高い。マダライルカもそうだが、基本的に外洋種は生存漂着が多い傾向があると言える。8例で雌雄が記録されているが、性差は見られない。体長 94cmの個体が8月に千葉県に漂着しており⁴⁰⁾、新生仔と思われる⁴⁴⁾。

(14) ネズミイルカ

39件中太平洋側が21件、日本海側が9件、津軽海峡やオホーツク海が9件となっているが、特定の地点（白尻、根室）での混獲記録が集中しているため、海域の密度を反映しているかは不明である。県別では北海

道（21件）が最も多く、青森県（7件）新潟県（5件）と続く。最南記録は和歌山県で1月に混獲された例⁴⁵⁾だが、通常の分布範囲は3件の記録がある千葉県付近が南限と思われる。

混獲が28件と70%以上を占め、特に4～5月に北海道で多数混獲されており、この時期に北海道沿岸に高密度に分布していると考えられる。地域別にみると千葉県が11～3月、新潟県が2～5月、青森県が3～5月と、冬から初夏に季節が移るにつれ記録のある緯度が高くなり、ネズミイルカの移動を示唆している。6～9月には海域に関わらずまったく記録が無くなる（図5）。目視調査でネズミイルカが多く発見される水温は7℃～16℃とされ³⁶⁾、この水温域は8～9月には北海道よりさらに高緯度にある³⁷⁾ことから、夏期には北上して日本沿岸にはいないと推察される。

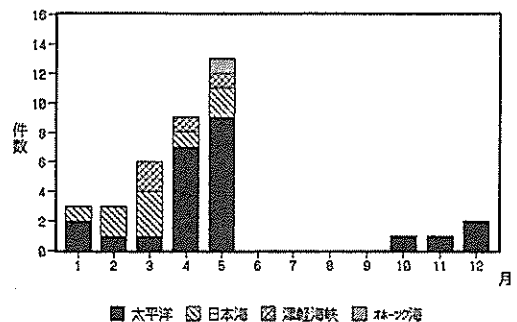


図5 ネズミイルカのストラディングレコードの海域別季節推移

新潟県の記録はすべて本州側での漂着で、佐渡島における記録がない。前述のごとく佐渡島は新潟県の混獲記録の8割を占めている。このことは少なくとも新潟近海のネズミイルカが本州沿岸寄りに分布していることを示していると思われる。

(15) イシイルカ

日本近海のイシイルカは、体側の白色域が背鰭下の付近まで広がるイシイルカ型（以下イシ型）と、胸鰭直後まで広がるリクゼンイルカ型（以下リクゼン型）の2型があり、冬の日本海から夏のオホーツク海、一部は太平洋側まで分布するイシ型と、冬～夏に三陸沖に分布し秋は太平洋沖合いに分布するリクゼン型は異なる系統群と考えられている⁴⁶⁾。46件のストラディングレコードのうち、型が判明している記録はイシ型が24件、リクゼン型が2件である。

海域別に月毎の記録を見ると（図6）日本海側は1～5月、オホーツク海側が8～9月に発生しており、日本

海一オホーツク海系群の移動と分布⁴⁶⁾に合致している。この点から、この海域の型の判明しない記録の個体もほぼイシ型と推察できる。冬期のこの系群が日本海のどのあたりまで分布しているかははっきりしていないが、ストランディングの記録では兵庫県(2月)⁴⁷⁾鳥取県(5月)⁴⁸⁾の記録が最も西の記録となる。ただし日本海側の記録30件の大半を占める新潟県(15件)と石川県(9件)の記録が、ともに月による偏りを示していないことから、イシルカは冬期の日本海では広範囲に分布していると考えた方がよいだろう。通常の分布域からはずれた記録として、2月に和歌山県で漂着⁴⁹⁾、5月に大阪府で迷入⁵⁰⁾した例があり、どちらもイシ型であった。このイシ型が日本海から瀬戸内海を通して来たのか、冬の三陸沖にリクゼン型と混在して小數分布するイシ型が太平洋沿岸を南下して来たのかは不明である。同じく5月に名古屋港に迷入した個体⁵¹⁾はリクゼン型であることが確認されており、少なくともこの種が太平洋沿岸を南下することはまれにあるようだ。

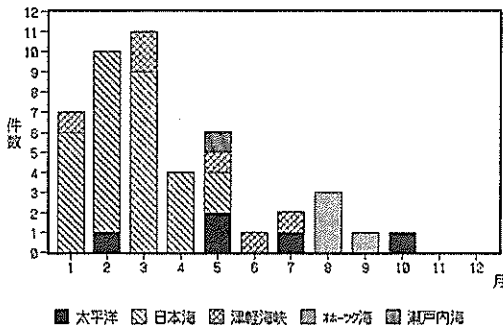


図6 イシイルカのストランディングレコードの海域別季節推移

混獲は46件中7件と少なく、単独の漂着例がほとんどである。性別及び体長の情報は比較的よく収集されており、雌雄はともに18頭が記録されて性差はない。日本鯨類研究所の研究では日本海一オホーツク海系群の50%成熟体長は雄が195cm、雌が189cm⁵²⁾で、この値を用いてストランディング個体を調べると、リクゼン型の可能性のある太平洋側の記録を除いて、雄が15頭中11頭、雌が16頭中10頭が成熟していると考えられ、成熟個体の割合が高い。妊娠雌が2月に富山県⁵³⁾、3月に石川県⁵⁴⁾で漂着しており、胎仔体長はそれぞれ72cm、61.4cmであった。

(16) スナメリ

スナメリのストランディングレコードはすべての鯨

種の中で最も多い。その資源量はけっして多くないと推察されるが、極めて沿岸性の強い種である⁴⁴⁾ことがその原因である。漂着が89件、混獲が77件と漂着がやや多いが、混獲の形態は沿岸の小規模漁業を反映して実に様々である。記録されているだけでも定置網(34件)、刺網(底刺網、浮刺網等19件)の他バッチ網、巻網、底引網、地引網、延縄等でも混獲されており、混獲例が漂着に比べて報告されにくい状況を考えると、実際の混獲数はもっと多いと思われる。漂着は通常単独で、生存漂着は89件中6件と極めてまれで、このうち3件は新生仔が親からはぐれて漂流^{55,56)}あるいは漂着⁵⁷⁾していた例である。遠洋型の種に比べて沿岸型の種に生存漂着が少ない理由としては、座礁の原因のひとつと言われる航路決定の判断ミス¹³⁾が起りにくいことが考えられるが、スナメリにおける死亡漂着の多さには、繁殖海域が沿岸のために新生仔の死体が漂着しやすい理由の他に、混獲されて溺死した死体が漂着している可能性も否定できないだろう。

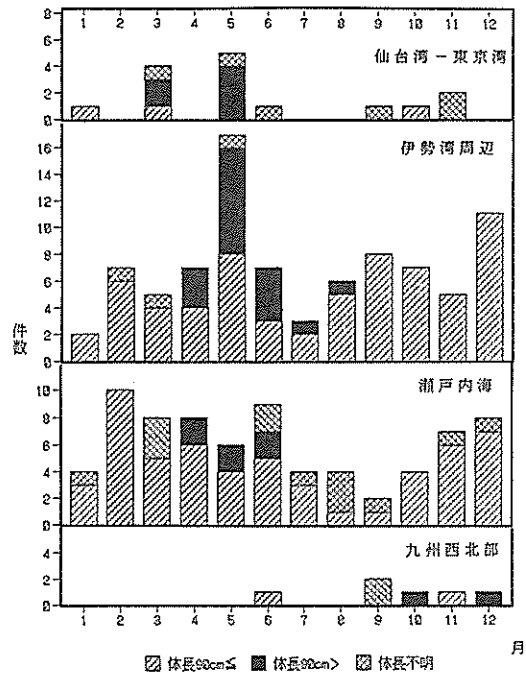


図7 仙台湾-東京湾、伊勢湾周辺、瀬戸内海、九州西北部におけるスナメリのストランディングレコードの体長別季節推移。複数個体が記録されている場合は小さい個体の体長を優先した。

Shirakiharaら(1992, 1993)は全国の漁協からのアンケート調査を行い、これをもとに日本沿岸のスナ

メリの分布密度が高い①仙台湾—東京湾、②伊勢湾周辺、③瀬戸内海周辺、④長崎を中心とする西九州、の4つの地域を示した^{58, 59)}。これに基づいてストランディングレコードを地域別に分類し、その季節変化と新生仔の割合を図7に示す。スナメリの出生体長は78~79cmとの記載がある⁴⁴⁾が、85cmで出産された例もあり⁶⁰⁾、ここでは授乳初期の個体も含めて90cm未満の個体を新生仔として取り扱っている。なおこの4地域に分類されなかった記録には静岡県(駿河湾、5件)、福井県及び石川県(各1件)がある。図を見ると①と②、③の海域では体長90cm未満の個体の記録が3月~6月に多く、スナメリの出産時期がこの付近にあることが推察される。④の海域では残念ながら記録が少なくはっきりしないが、Shirakiharaら(1993)は精力的に収集した数多くのスナメリのストランディング個体を分析して、長崎を中心とする九州西北部のスナメリ個体群の繁殖期が他の3地域と異なり8月~4月にあることを示している⁵⁹⁾。スナメリの生息地域の密度は繁殖期に高くなることが知られており^{44, 61)}、ストランディングレコードも太平洋側の①と②の海域で5月に記録が突出している。伊勢湾—三河湾では新生仔の記録を除外しても12月に次いで件数が多い。瀬戸内海の記録ではこのようなピークははっきりしないが、夏から秋にかけて記録の少なくなる点で太平洋側の2海域と共通している。

(17) その他の鯨種

シャチ

シャチは過去に北海道周辺~三陸沖及び紀伊半島沖で捕獲されてきた他、主に太平洋側で散発的に目撃される種¹⁴⁾だが、ストランディングレコードは極めて少ない。漂着記録は1件だけで、他には1970年4月に東京湾の港内に11頭が迷入した記録がある⁴⁰⁾。また、この原稿執筆中に報告されたシャチのストランディングレコード⁶²⁾は、1925年3月の古い記録だが、国内では唯一のマス・ストランディングの記録である。

コククジラ

太平洋の東側を南北に回遊するカリフォルニア系統群に対し、西側を回遊するアジア系統群には、大陸沿岸を通るルートと日本の太平洋沿岸を通るルートがある¹⁴⁾。日本のコククジラのストランディングレコードは4件あり、すべて太平洋側で発生しているが、一部にはこれらはカルフォルニア系統群からはぐれた個

体であり、太平洋沿岸ルートはすでに壊滅しているとの意見もある。しかしながら1993年4月に東京都の大島沿岸に2~3頭のコククジラが20日以上にわたり滞在し、摂餌行動も観察されたこと⁶³⁾は、アジア系統群の太平洋沿岸ルート存在のひとつの証拠と言えよう。今後は漂着個体のDNA分析等による系統群の証明が期待される。

おわりに

いくつかの鯨種について、ストランディングレコードから得られる情報に既知の情報を併せて、推論も含めて様々な角度から検討した。もとより多くの方々のご努力で集められた情報を利用させていただいて解析したのみで、自ら現場で生物学的な調査まで行った事例はほんのわずかである。しかし最初に述べたように、1件の情報のみでは単なる事例の記録にすぎなくても、それが集積されれば様々な鯨の生態を証明あるいは推察する手段になり得ることを、多少なりとも示すことができたかと思う。

ここで紹介したストランディングレコードは、基本的には興味をもつすべての人達が利用できるものである。今後はすでに鯨研通信や鯨研叢書で公表されている情報はもとより、データベースの利用についても一定の規則の下で公開していく予定である。多くの研究者、あるいは関心のある方々に利用されることで、より正確で使いやすいデータベースに改善できることを期待している。

ストランディングレコードの収集作業は、多くの方々のご協力無しにはなし得ない。読者の皆様も、もし、身近なところで海産哺乳類の漂着、迷入、混獲等を見たり聞いたりしたらぜひ、日本鯨類研究所のストランディングレコード担当者にご一報願いたい。新聞記事などの切り抜きでも有力な情報となるし、ご入り用であればいつでも日鯨研の記録用紙を送らせていただく。収集して欲しい情報の内容は鯨研通信連載のストランディングレコードを参考にいただき、写真があればより正確な情報になる。さらに可能であれば、DNA分析のために皮膚か肉片をほんの数グラム冷凍あるいはアルコール固定していただけるとありがたいし、腕に覚えがあれば解剖して生殖腺や寄生虫なども採集していただければ・・・欲を言えばきりがないのでこの辺でやめておこう。皆様のご連絡をお待ちしている。

参考文献及びストランディング レコード番号*

- 32) 水産庁漁業公害(有害生物駆除)対策調査検討委員会(1986) 漁業公害(有害生物駆除)対策調査委託事業調査報告書
- 33) 古賀(1986) マリンスノー (4) 1-2.
- 34) 毎日新聞1995. 6. 25付記事
- 35) Miyazaki, Kuramochi and Amano (1991) Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo.(24) 131-139
- 36) 笠松、宮下(1991) 鯨とイルカのフィールドガイド 東京大学出版会
- 37) 気象庁海洋気象部(1989) 北西太平洋・全球海面水温年分布図
- 38) 河村、中野、田中、佐藤、藤瀬、西田(1983) 鯨研通信(351・352) 29-51
- 39) ストランディングレコードO-171
- 40) 鴨川シーワールド(1992) 鴨川シーワールド報告業績集1970-1991 (1) 347-349
- 41) Miyazaki and Nakajima (1989) Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo. (22) 235-249
- 42) ストランディングレコードO-050
- 43) Miyazaki, Kasuya and Nishiwaki (1974) Sci. Rep. Whales Res. Inst. (26) 227-243
- 44) 水産庁(1994) 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(1)
- 45) Miyazaki, Amano and Fujise (1987) Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo.(22) 235-249
- 46) 宮下(1988) 月刊海洋科学(20) 528-535
- 47) ストランディングレコードO-258
- 48) ストランディングレコードO-115
- 49) ストランディングレコードO-072
- 50) 宮崎(1986) 遺伝(40) 49-55
- 51) ストランディングレコードO-300
- 52) 日本鯨類研究所(1992) 平成3年度日本周辺イルカ生物調査報告書
- 53) ストランディングレコードO-076
- 54) ストランディングレコードO-132
- 55) 岩川(1990) エコロケーション(11) 6
- 56) 呉羽(1975) 山の上の魚たち(14) 6
- 57) 岩川(1986) エコロケーション(6) 3
- 58) Shirakihara, Yoshida, Shirakihara and Takemura (1992) Marine Mammal Scienc (8) 160-164
- 59) Shirakihara, Takemura and Shirakihara (1993) Marine Mammal Science (9) 392-406
- 60) 伊沢、片岡(1965) 日動水誌(7) 56-62
- 61) 宮下、島田、帝釈、浅井(1994) 平成6年度日本水産学会秋期大会講演要旨323
- 62) ストランディングレコードO-314
- 63) Ishikawa, Saino and Nakamura (準備中)

* 31) 以前の引用文献については前号を参照されたい。またストランディングレコードについては、鯨研叢書6及び鯨研通信(383, 384, 386, 387号)を参照されたい。

日本のクジラ関連コレクター紹介(1)

近年、日本人のクジラやイルカについての関心が大変に高いことは、書店にはクジラ・イルカに関連した図書が他の動物を圧して多く並べられ、クジラ・イルカの版画やぬいぐるみや沢山の種類のグッズがよく売れており、街やテレビでは、クジラ・イルカを描いたPRやCMのポスターや映像がよく目に付くことなどから伺い知ることができる。それとともに、日本には鯨類関係の図書やグッズのコレクターやコレクションに関心をお持ちの方が大勢いらっしゃる。

そこで本誌は、クジラ・イルカ関連図書や美術品、グッズについての、日本における優れたコレクターを紹介させて頂き、多くの人々にクジラ・コレクションの素晴らしさや楽しさを知って頂くとともに、鯨類と捕鯨についての幅広いご理解を深めて頂きたく、以下の内容を盛り込んで、各人から直接に紹介して下さいよう企画したところ、幸いにもコレクターの多くの方々の御賛同を得て、貴重で興味深い原稿を寄せて頂いた：

- ・コレクションの種類(書籍、美術品、玩具、グッズ、その他)とそれぞれのコレクションのおよその数

- ・コレクションの特色および自慢の希・珍品
- ・コレクションの動機、収集歴およびコレクションのノウハウ・苦心談
- ・コレクションに関連した独自の出版、展示、その他の活動
- ・コレクションのカタログおよび公開の有無
- ・クジラのコレクションに関する意見、提言、その他

本号からそれらのコレクターの玉稿を順次掲載する。依頼したけれども、残念ながら種々の御都合で執筆を辞退された方もいらっしゃる。また、われわれの情報不足により、原稿の依頼をしなかったコレクターが多くいらっしゃると思う。それらの方について、自薦、他薦を是非にお願いする。なお、読後の御感想と御意見を本誌にお寄せ下さるようお願いする。
(図書課 清家紀子)

A. 鯨の郷土玩具

細 田 徹 (勇魚文庫)

鯨の本は当然として、勇魚文庫で力を入れて収集しているもの、一つに、鯨車、鯨舟などの郷土玩具(鯨郷玩)がある。10年そこそこの収集歴にすぎないが、素朴なうちに引き付けられるものがあり、そこに込められた歴史やなんともいわれないその味わいに魅力を感じるからである。江戸時代から明治、大正にかけて日本各地に発生し、育てられ、引き継がれ、作り続けられているおもちゃを普通我々は郷土玩具と呼んでいる。郷土玩具は各地にそれぞれ特色のあるものが生まれた。紙、木、土、藁、竹などすべて自給自足で、その土地の生活、習俗、信仰を反映したおもちゃが作られていた。その中に、より古くから作られていたもの、一つに鯨玩具がある。江戸時代からの捕鯨地では、これにちなむ鯨玩具が作られた。鯨が来るのを待つあいだ、漁師は折れた櫓や銚の柄などの手じかな材料を使い、子供に与えるおもちゃとして、鯨舟や鯨車を作ったのである。今一般に知られているものには土佐、紀州のものがあるが、長崎県五島有川でも江戸時代に作られたという2艘の持双舟に掛けられたセミクジラの玩具を見ることが出来た。台車の上に乗せられ紐で子供が引いて遊べるようになっている。山口県長門市の通浦や瀬戸崎浦ではやはり捕鯨にちなむ、鯨彫といわれる鯨の雄姿を丹念に彫り上げたものが作られたという。このように現在知られているものもあるが、捕鯨の終焉と共に消えていったであろうが、日本各地の捕鯨地では荒くれ男が鯨を待つ間のつれづれに、捕鯨に思いを込めつつ、子供に与える鯨玩具を作ったのである。

あたかも18、9世紀の頃アメリカの捕鯨船が鯨を追って大洋に乗り出していた時代、長い航海のあいだ、鯨捕りたちが鯨を探す間の手すきびに、家族や友人への土産として、マッコウクジラの歯や骨でスクリムショーを作ったのと同じように。

このように作り続けられた鯨玩具のなかには、いつしか子供のおもちゃを越えて、観賞の要素のある民芸品として市販されるようになり、現在まで命脈を保ち続けることができたものもある。土佐、紀州の鯨車、鯨舟などである。

他に鯨郷玩としては、長崎の諏訪神社の大祭に引き出される鯨の山車(だんじり)を玩具にした鯨の潮吹き、変わったものに、江戸ゴマの一つ、鯨の潮吹きゴマなどが知られている。ここでは、当文庫のコレクションの中から2、3を取り上げて紹介する(写真1)。

長崎「鯨の潮吹き」

「長崎くんち」は諏訪神社の大祭で、10月7日から3日間行われるが、この時に万屋町から出される鯨の山車を模して幕末の頃から作られたもので、鯨のだんじりとも呼ばれている。波模様の台車に乗せ、鰭が動くようになっている。割竹で潮吹きをあらわし、鯨は和紙で作り真黒に塗られている。写真2は小型のものであるが、20センチ程の大型のものもある。昭和32年(1957)の年賀切手の図にとりあげられており、張り玩具として優れたものであるが、残念ながら現在は廃絶している。

万屋通り町会（旧町名万屋町）の鯨曳は安永5年（1776）愛宕神社祭礼に米挽山車として奉納されたのが始まりで、安永7年初めて諏訪神社に奉納され、以来第2次世界大戦前後の中断を除き、連続して続き今日に至っている。この鯨の潮吹きは万屋町が昔魚問屋の町として繁栄していた縁で、鯨肉の取引に万屋町に入入りしていた肥前唐津呼子の鯨組の宰領中尾甚六及び羽指勘助の二人の勧めによって米挽山車を廃し、鯨の潮吹きへの趣向が取り入れられたものと町記録に残されているという。この鯨の潮吹きは、通常は7年に1度「長崎くんち」に出され、諏訪神社に奉納されるのである。



写真2 長崎 鯨の潮吹き

江戸ゴマ「鯨の潮吹きゴマ」

男子であれば誰でも、子供のころにコマで遊んだ思い出をもって。一口にコマといっても戸外で遊ぶ地ゴマと室内で遊ぶお座敷ゴマがある。なおこの外に特殊なコマとして、寄席芸人の扱曲ゴマもある。東京で作られる江戸ゴマの中には、回すと花が咲いたように美しいので花ゴマと呼ばれているもの、木で作られた土俵の上で二つのコマを回し、相撲を取らせる相撲ゴマ、このようなお座敷ゴマの中で古くから親しまれているもの、一つに鯨の潮吹きゴマがある（写真3）。15センチ程の木で作った鯨の潮吹き穴に竹ひご

を差し込み、その竹ひごの上で皿回しのように、皿ゴマを回して遊ぶものである。皿ゴマは普通は回転軸上にくぼみがあるが、例外的に回転軸を外れたところにくぼみがあるのが鯨の潮吹きゴマで、これによって上のコマを回すと、下の竹ひごが振動し、鯨が微妙に動くようになっている。

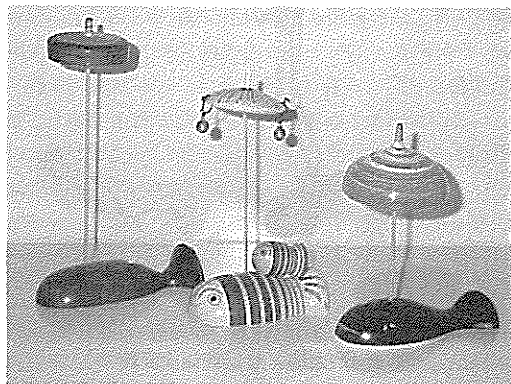


写真3 江戸ゴマ 鯨の潮吹きゴマ

コマの常識をこえた、すぐれたアイデアのコマである。この鯨の潮吹きゴマは現在でも作られており、作者によって形や色付けが異なるものが何点かある。デパートなどで催される「江戸職人展」などで手に入れることができる。

紀州「鯨車・鯨舟」

紀州は古くから捕鯨で知られており、捕鯨地としては太地、三輪崎、古座などがある。太地では飛鳥神社で毎年1月13日に行われる「お弓祭」の際、木製のセミクジラの模型を的に縛り付け、弓を射終わると漁師たちがこのセミクジラを奪い合い、それを舟神様に祀ると大漁するといわれている。このセミクジラの模型は極めて抽象的に作られており、一見ただけではと

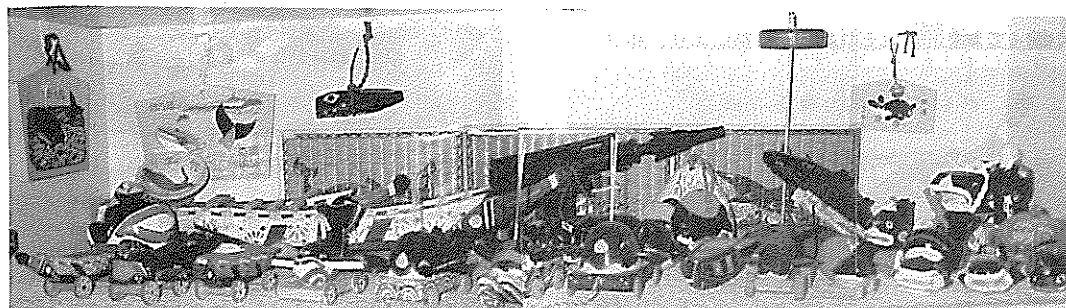


写真1 勢揃いした鯨郷玩

てもセミクジラとは気がつかないが、随分と近代的な感覚をもっており、貴重な存在である。このセミクジラの模型を玩具にしたものが、現在太地で郷土玩具として売られている。大小各種あり、車を付けたものと、付けてないものがある（写真4）。

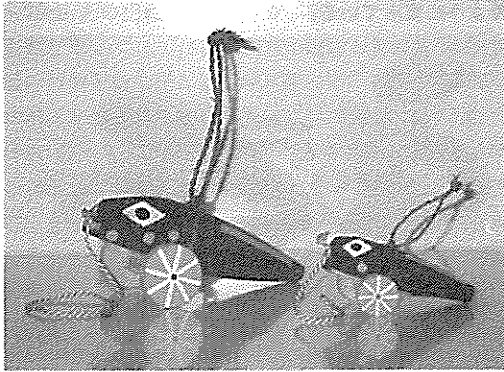


写真4 太地 セミクジラ玩具

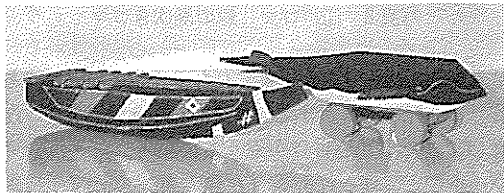


写真5 紀州 鯨車・鯨舟

写真5の紀州鯨車・鯨舟玩具は現在は作られていない。舟の舷側に描かれた模様は太地の持双舟を表し、鯨車はセミクジラに車を付けたものである。他に2艘の持双舟に掛けられたセミクジラの玩具もある。舟の特徴をよく表し、優れたものである。現在、那智勝浦「小倉家」で製作、販売されている、写真6のくまの古式くじら舟は太地古式鯨舟を模したもので、舟大工により一艘ずつ手作りされ、それを奥さんの山本詮子さんが舟毎に模様を塗り分けている。実に手間ひまかけたもので、昔の趣を持った郷土玩具である。「小倉家」の二階には太地古式鯨舟の勢子舟はじめ全舟団39艘が揃っており、それぞれの舟の役割により、鮮やかな

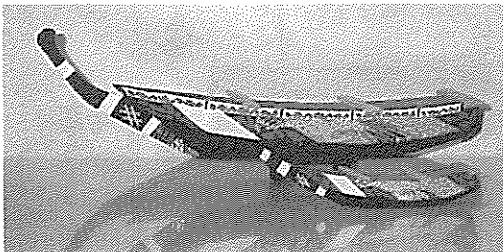


写真6 くまの古式くじら舟

色彩で鳳凰などの模様を描かれている。全舟団揃うと、それは見事なもので、昔日の太地鯨組舟団の姿を彷彿とさせる。太地へ行くときには勝浦のお店に寄って見せていただいている。先年ご主人が亡くなられ、奥さんと娘さんが土産物店、郷土玩具作りと頑張っている。

土佐「鯨車・鯨舟」

土佐の鯨玩具といえば、必ず松下駒弥太の名が出て来る。城田政治著『土佐のおもちゃ』によると、松下駒弥太は大正9年頃70余才で亡くなった方で生前は捕鯨の羽指として活躍した。この羽指の駒弥太は盛んに鯨車、鯨舟を作って、始めて商品として各方面に送り出し、彼の作品には必ず「駒弥太」とか、或は「松下駒弥太」と自名が記されている。彼の作品は一見して芸術的で、色といい形といいみごとなもので、土佐の国宝的玩具であるという。ちなみに故城田政治氏の駒弥太作の鯨舟を含む鯨郷玩などのコレクションは、現在は高知県立歴史民俗資料館に寄贈されており、平成7年5月企画展「おもちゃ・遊びのかたち」にて公開されたが残念ながらどうしても都合がつかず見る機会を失ってしまった。

私にとって駒弥太は幻の鯨郷玩である。松下駒弥太のあと廃絶、復活を繰り返しながらも、岩川常之助、泉井惣太郎、改田五郎、岡林藤吉などの作者により、鯨玩具が作り続けられていったが、昭和50年3月岡林藤吉氏も亡くなられた。現在は土佐民芸社などで製作されているが、旧作品はリアルな迫力のあるもので、大きいものもあったが、現在はそれらをしのぶ程度のものとなった。写真7は少し古いものであるが、時代や作者は不明である。

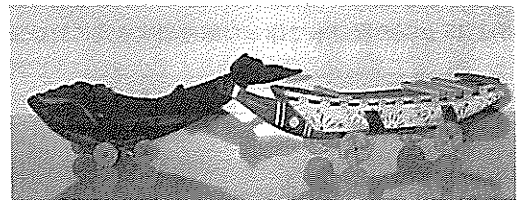


写真7 土佐 鯨車・鯨舟

鯨郷玩収集

鯨郷玩は極めて古い歴史と伝統をもっている。しかし玩具のもつ歴史の新旧は、郷土玩具の条件として問うところでない。ごく新しく作られたものでも、作ら

れた土地の生活、習俗、信仰などの深いつながりを持つような玩具は郷土玩具といってきしつかえない。このような意味で、山口県長門市通では鯨を捕獲したさいに胎児が宿っていたら鯨墓に手厚く葬り供養したという。このような風習から生まれた子持鯨土鈴は郷土玩具として取り入れたい。北海道室蘭八幡宮は浜に打ち上げられた鯨を売った代金が、建造費の一部になっており、別名「鯨八幡」の愛称で呼ばれ、奉納の絵馬のデザインは鯨を使用しており、この絵馬もまた広い意味で郷土玩具といってよいと思う。しかしその郷土のもつ貴重な特色を失って、同じ場所で作られ各地に配られた類似の作品が鯨とかかわりのある観光地で氾濫している。こうしたものは郷土玩具ということはいできない。

鯨郷玩はその土地にでかけたおりに入手するのが基本であるが、廃絶してしまった玩具は、もはやその土地でも手にいれるのは困難である。かえて、郷土玩具収集家が集中する都会で手にいれる機会が多い。気にいった鯨郷玩は三つ買う。一つは飾って楽しむ、もう一つは保存用に、最後の一つは鯨仲間との交換用である。あと郷土玩具収集家が手放したものが古道具屋や骨董市に並ぶことがある。常々古道具屋や骨董市をこまめに回るのを怠ってはならない。ときには鯨郷玩が他のおもちゃに混じって埃を被っていたりするのである。このようにして集めた鯨郷玩が新旧取り混ぜ

て100点程になるが、その発生を調べるのも変遷を研究するのも興味があって面白いが、何と言っても仕事に疲れて帰ったとき、それを手に取り眺めていると、なんともいわれない素朴なその味わいが香り高い一杯のコーヒーのように、疲れた心を癒してくれるのである。

「勇魚文庫」といっても知る方は少ないと思うのでここで簡単に紹介させていただくことにする。

勇魚文庫は鯨文献、資料の収集を主とし、研究者には門戸を開放している。収集範囲は和洋新旧を問わず、江戸時代の鯨絵巻から鯨の絵があればチラシ1枚に至るまで収集の対象としている。しかし個人で仕事の合間をみでの収集なので、おのずと限度があるし、収集の進み方も遅々たるものである。

残念ながら閲覧などの設備が不十分なので一般には公開できないが、その代わりとして勇魚文庫通信『鯨遊』を年4回発行している。鯨の本新刊案内をメインとして雑文を交えてのささやかなものであるが、鯨仲間の応援もあることなので、なんとか続けて行きたいと思っている。貴重な資料に出会う感激は格別である。これからもさらに資料の充実を図るべく努力して行くつもりである。

勇魚文庫連絡先

〒112 東京都文京区後楽2-12-12 細田 徹

B. 私の鯨書収集

粕谷俊雄（遠洋水産研究所）

コレクションについて書くように言われた。遊びの分野で物を書くのは始めてで、少しおもはゆいが、楽しそうなので素直に受けた。鯨書を主体にしつつ、指定の情報を含めて述べる事にする。

下に置いている出版物・操業記録・写真・標本などは除外する。

定義

ここでは混乱を避けるために、収集とは「一定の範疇に属する複数の物品を、所有の目的で管理下に置くこと」と定義する。「範疇」は自分で決めても、他人が見つけてくれた共通属性でもいい。自分の作品を積み上げるのも収集かも知れないが、ここでは含めない。私がこれまでに研究業務として入手して、日本鯨類研究所、国立科学博物館あるいは遠洋水産研究所の管理

私の収集歴

出張先では、民芸品、道具、石ころなどを今でも集めるが、これまでに系統的な収集の対象としたものには、植物標本、貝、古銭、古鏡、海産哺乳類関係の書籍、捕鯨道具などと、それらの参考文献がある。

植物採集は中学から高校まで続き、大学受験で中断して、今では収集品も逸散した。貝の収集は大学時代から始めて、結婚後も妻と海岸や山に採集に出かけたが、自然破壊の進行を目にするのが辛いのと、自分もそれにくみすることになると感じて20年程前に止め

た。海の貝は近くの小学校に寄付し、蝸牛だけは今も手元に置いている。古銭と古鏡は1960年頃に始めて、相当の資金をつぎ込んだ後、清水転勤で時間がなくなり、鯨書収集に比重を移して今に至っている。

鯨書の収集

私の鯨書収集は、1961年に大学を卒業して鯨類研究所に就職してから始めた。職場にも蔵書はあったが自分の本が欲しくて、古本屋をまわっては鯨や捕鯨の本を買って丁寧に読んだものである。当時は初任本俵12,300円、1ポンドが1,000円の時代で外国書籍を買うのは大変だった。1966年に東大海洋研究所に移り、いるか類の分類学と生活史の研究を始めた。この分野では全く基礎のない研究所のため文献が少なく、蔵書の必要を痛感して集書に励んだ。当時よく購入した西ドイツのOtto Koeltzからは、近ごろは面白いものが出なくなった。ゼロックスがこのころに普及し、本郷の図書館にない文献は他所の研究者にお願いしてはコピーをとらせて頂いた。小川氏や神谷氏には随分お世話になった。小川氏の旧蔵書を1冊本郷の本屋で見かけて最近購入したが、残りはどうなったのだろうか。



図1. 北極海捕鯨図(18世紀)。この絵を水平にセットし、45°に傾けた鏡に写して、凸レンズを通して眺めると実景らしく見えるという。そのため上のタイトルは逆字である。4枚組、原寸約31x40cm、手彩色銅版画。

今の職場に移ったのは、1983年4月である。これに伴って、仕事の重点が鯨の生活史と資源管理に移り、次の様に収集方針を固めた。

- (1) 研究関係の論文別刷：仕事のために集める。新しいものはただで貰える。
- (2) 鯨の生物学・資源関係の新刊書：質の優れた物から購入する。

(3) 鯨学と捕鯨の古書籍・物品：歴史資料としての収集を目指す。浪費の主対象。

つまり、3番目の比重が大きくなった訳である。昔の捕鯨航海記は、希少鯨類に関する情報の宝庫であり、捕鯨船が立ち寄った島々の民族資料としても面白い。ペリーの航海記もそうだが、開港後にやってきたアメリカ捕鯨船の記事にも面白い日本観察がある。鳥の古書には美しい手彩色図があり高価なものが多いが、鯨書の図は稚拙なせいいかそれほどでないのは幸いである。それでも骨格図などには今の写真版にはないすばらしい味がある。最近は何高の魅力のため、つい外国書に手が出る。日本の古書は高い気かするのは僻みだろうか。

10世紀以来栄枯盛衰を繰り返した捕鯨は、いま特殊な形で生き残っているが、近い将来に本格的な商業捕鯨が復活するとは考えにくい。極相に近い捕鯨の現状を資料で残したくて、色々な紙屑も集め始めた。スーパーマーケットの鯨製品のパックなども対象である。品名、重量、単価、日付が入ったラベルは鯨肉流通の基礎史料である。これこそ記録すべき現状かも知れないが、紛い物の鯨ベーコンが1パック2-3千円もするで手が出にくい。年に1-2回ほど鯨製品の特売日を設ける必要がでてきた。

鯨書収集の苦心

本は使うから買うのではない、使うかもしれないから、転勤にも持って行けるから、美しい本は持つだけで楽しいから買うのである。今は必要がなくても、よい本はいつか役にたつと信じて買うべきである。そのために酒やタバコを止めれば体にも良い。

本を沢山買うこつは、衝動買いをして借金をすることにある。私のモットーは「買わずに後悔するよりも、買って後悔しろ」である。私は家内から借金を絶やしたことがない。貢献を評価して、死後は家内に収集品を残すことにしている。

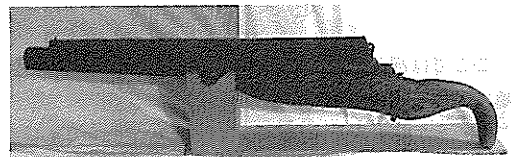


図2. 房州乙浜の会社がツチクジラ漁に使ったいわゆるグリナーガン。実測口径約37mm、砲身長約92cm。1990年に鴨川の道具屋で購入。

失敗談を一つ。1972年に資源科学研究所が解散し、6月頃に面白い鯨書が流出した。Kukenthalの鯨解剖、Jenkinsの捕鯨史、Goodeの米國水産誌などを考古堂から入手したが、その頃のある日、Jordanのオートセイ報告4冊揃いがやってきた。欲しかったが、これ以上家内に借金を申し込む勇気もなく、3冊だけを20,000円で買った。残った第3巻は著名な古生物学者の手に納まったそうである。そこにはステラー海牛の記事の英訳があるという未練もさきながら、揃いを半端物にした文化財散逸の罪の意識と、考古堂の親父の残念そうな顔が思い出されて最近まで辛かった。幸いにも、20年後の1992年7月に、似た状態の第3巻だけを神田の古書展で見つけて12,000円で買い、やっと罪を償った感じがした。本は無理をしても買えという教訓である。

自慢の品

収集を支配するのは、金と努力と運である。各要素の比重は収集対象や、収集方法によって違うが、古紙の山から掘り出すのでもない限り、古書店回りとカタログめぐりは欠かせない。このように収集成果は金力に大きく左右されるから、自慢できるような希覓書を貧乏人が持つ筈がないし、本を買う前に置き場を考える兎小屋の住人が量で勝つのも無理である。こんな訳で、私には自慢の収集品というものはあまりない。

しかし、楽しい出来事や親しい人の思い出につながる品ならばいくつもある。大学を卒業して鯨研に入った頃、恩師の一人西脇氏からはBeddardの鯨の本(米國版)を分けて頂いた。そのころ本郷の本屋が赤い表紙の英國版を持ってきたので買おうとしたところ、氏は米國版の緑表紙の品を私に3/4程の価格で分けてくれた。氏はそれに金を足して赤表紙のやつを購入し

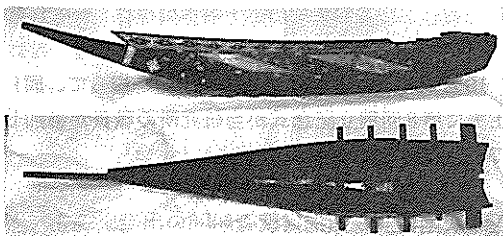


図3. 松竹梅を描いた勢子船の模型。「湊本吉町式丁目大東氏」と読める2行の墨書が船底にある。卍は古座鯨組の印の由(太地町松井進氏)。1995年9月に鴨川の道具屋から購入。

た。今では英國版も持っているが、むかし勉強に使った古い方も懐かしく大切にしている。大村氏からは生前に捕鯨航海記を頂いた。1937年秋の神戸出航から、日中戦争による母船の一時徴用、南水洋操業、ロンドン捕鯨会議、ノルウェー・米國の視察をへて、翌年夏に帰国するまでの日記である。日本の遠洋捕鯨草創の頃の歴史的記録として価値あるものと信じている。当時の写真もあるので、美しい本にして出版するのが夢である。読みにくい文字に手をいれ、別の資料をもとに航跡図も完成した。あとは注釈をつけて、出版経費を工面するのみ。

A氏からはIWCの土産にハイロアザラシの本を頂いたり、B氏からは茶色に変色した捕鯨協会の小冊子を頂いたりして、今でも大切にしている。C氏からは90mmと75mmの捕鯨鉞を頂いた。1本90kgの大物である。錆止めをしてベランダの雨のかからないところに置いてあるが、動かすのが次第に大儀になった。私の死後、遺族がこれを大切にすることを祈るのみ。ほかに、鯨資料収拾の諸先達から、ときどき素晴らしい情報誌を頂いている。いつかお返しをしたいものである。

収集品の量

鯨関係でも希覓書の復刻出版が盛んである。オリジナルの保護になるので、努めてオリジナルとペアにしている。また、職場と自宅に同じ本を置く事もある。これらを含んだ収集数は、次のようになっている。

- (1) 研究関係の論文：リストなし。
- (2) 捕鯨協会の謄写印刷本。購入したり、先輩から頂いたりした。リストなし。
- (3) 鯨の生物学に関する外国書(1946年以後)：リストゆっくり作成中。
- (4) その他の外国鯨書(捕鯨関係全部と1945年以前の鯨の生物学書)：リストあり、約600冊。
- (5) 日本の鯨書：3-400冊か、リストあるも冊数不明。ワープロにその機能がない。
- (6) 鯨肉広告、商品ラベル等の紙屑類：リストなし。これから積極対応したい。

なお、編集者から収集品の展示やリスト出版の計画について質問があったが、それほどの収集品ではないし、そのような計画もない。



図4. マッコウクジラのスクリムショウ。1967年3月にLa Jollaで260ドル(9.4万円)で購入。そのホテル代は1泊12ドルだった。米国のD.W. Riceと2カ月半の航海をした後だったので買ったが、後の滞在は苦しかった。

そのほか鯨書収集に関して思うこと

(1) 日本人の鯨観の動向：日本には少数意見を排除し、自らを英雄的被害者集団に擬したがる精神風土がある。かつての大戦への道も、今の捕鯨世論の形成も、その背景にはこの一億総マインド・コントロール的な風土があると見るが、いま新しい鯨カルト集団が胎動しているのが注目される。その動向を見たくて馬鹿みtainな鯨書を買集めたが、読んでみたら楽しかった。児童書の動向も面白そう。

(2) 紙の劣化防止対策：簡単な脱酸処理法がないものか。大戦直後の劣悪紙が特に問題。

(3) 空虚な鯨書：情報も載せず主張もなく、出て流れて消えるだけの小便鯨書は困りもの。買わずに無視して良いのだろうか。

日本鯨類研究所関連トピックス (1995年9-11月)

第18回水産資源管理談話会の開催

当研究所・資源管理研究所が主催する標記会合が、8月30日午後当研究所会議室において約30名の参加の下で開催された。今回の話題は「国際会議における資源評価と資源管理」であり、この総合テーマの下で、遠洋水産研究所の平松一彦氏が「資源評価の手法について」、同研究所の魚住雄二氏が「資源評価と管理の実際」と題する話題を提供し、それらの話題に基づいて、質疑討論が活発に行われた。

当研究所評議員会・理事会の開催

当研究所は9月19日に評議員会・理事会を開催し、平成7年度の事業計画と収支予算案を中心に審議され提案どおり可決された。

シロナガスクジラ国際調査計画会議の開催

IWCが調査費を支出した日本の調査のための計画会議が10月2、3日に当研究所会議室において南半球ヒゲクジラ分科会議長J.L. Bannister氏、IWC事務局員G. Donovan氏、日本人調査関係者の参加の下で、加藤秀弘遠洋水産研究所大型鯨類研究室長を議長として開催された。調査海域、調査方法等について検討した。

IDCR 調査航海計画会議の開催

1995/96年度のVI区におけるIDCR調査計画会議

は、10月4~6日に当研究所会議室でIWC事務局員G. Donovan氏ら外国人3名、日本人調査関係者多数の参加の下で、加藤秀弘遠洋水産研究所大型鯨類研究室長を議長として開催された。

当研究所の一部が階を移動する

10月7~10日の間に、当研究所の6階部分が同一建物の5階に移動・集中し、それに伴い、研究所の総面積が拡大し、各部分の配置が大きく変更となった。

当研究所評議員会・理事会の開催

当研究所は10月16日に評議員会・理事会を開催し、理事1名、評議員1名選任を中心に審議され、いずれも提案どおり可決された。守矢哲氏が常勤理事として就任した。

当研究所創立記念日の祝賀行事

10月30日の当研究所の創立記念日を祝って、同日正午に第8回創立記念式が当研究所の職員が参加して、会議室でささやかに開催された。

第9次南極海鯨類捕獲調査船団の出港

11月2日に第9次南極海鯨類捕獲調査船団は、母船・日新丸は因島から、標本採集船・第1京丸、第25利丸、第18利丸は下関から、目視調査船第2共新丸は瀬戸田から、それぞれ調査海域へ向けて出港した。

第388号 1995年12月

当研究所から西脇研究室長を調査団長として10名が調査員として参加した。

当研究所評議員会・理事会の開催

当研究所は11月30日に評議員会・理事会を開催し、平成6年度事業報告ならびに収支計算書の承認等の他

に長崎理事長の退任に伴う役付役員の選任および顧問2名の委嘱について提案し、大隅理事長、守矢専務理事を12月1日付にて選任すると共に議題全部について提案どおり可決された。

長崎福三、田中昌一の両氏が顧問に委嘱される。

日本鯨類研究所関連出版物等 (1995年9 - 11月)

[印刷物]

：鯨研通信, 387:16pp. 日本鯨類研究所, 1995/9.

：日本鯨類研究所年報 (平成6年度) :71pp. 日本鯨類研究所, 1995/10.

石川 創：ストランディングレコードから見た日本沿岸の鯨類の生態 (I)。鯨研通信, 387:1-7, 1995/9.

大隅清治：クジラにとって肥満とは何か。鯨研通信, 387:7-13, 1995/9.

大隅清治 (監修)：音でなかまと話すクジラ・イルカはおはなし図鑑①。18pp.ブックローン出版, 1995/9.

大隅清治：独見独語 21世紀見据えて漁業存続を。水産週報, 1379:3, 1995/11/5.

長崎福三：マイワシはいつ戻ってくる。中央公論:142-143, 1995/11.

西脇茂利：鯨族回遊。FUKUOKA STYLE, 12:54-55, 1995/10.

三崎滋子：鯨を食べてなぜ悪い? =鯨問題は文化問題=。あろーら, 1:150-152, 1995/11.

SHIMADA, H. and PASTENE, L.A.: Report of a Sightings Survey off the Solomon Islands with Comments on Bryde's Whale Distribution.(SC/46/025) : REP.INT.WHAL.COMMN 45:413-418, 1995.

[放送・講演]

大隅清治：鯨類のバイオテレメトリー研究に関連する生態と生理。第13回岡村セミナー、東京理科大学・セミナーハウス、1995/10/27-28.

[新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・鯨類調査に備え 6日まで鯨研で計画会議：みなと新聞 1995/10/4.
- ・調査捕鯨船団が出航：日本経済新聞 1995/11/2.
- ・調査捕鯨船団が出港：読売新聞 1995/11/2.
- ・今年も調査捕鯨実施 南極海へ向け5隻出港：日本経済新聞 1995/11/2.
- ・鯨を知ろう 戸隠化石まつり：信濃毎日 1995/11/4.
- ・南氷洋の調査捕鯨へ出港 日新丸船団：新水産新聞 1995/11/11.
- ・陸揚げの鯨肉はマッコウクジラ：河北新報 1995/11/12.
- ・ミンククジラ400頭を計画 南氷洋鯨類捕獲調査船が出港：水産タイムス 1995/11/13.
- ・シロナガス、ミンク鯨調査船2隻出港：みなと新聞 1995/11/14.
- ・シロナガスなど調査へ 南氷洋VI区 昭南、2昭南が出港：日刊水産経済新聞 1995/11/15.
- ・シロナガス・ミンク鯨の調査へ昭南丸が出港：日刊水産通信 1995/11/20.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査の母船 2日、広島県因島から出港：日刊水産通信 1995/11/20.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・朝日報道でわかった昨今鯨肉事情：財界展望 1995/9.
- ・今年度の調査計画会議 大型ヒゲ鯨 IDCR 東京会議開催：水産週報 1995/10.

- ・「鯨研通信」財団法人日本鯨類研究所 賛助会員募集：インフォメーション 1995/11.
- ・南氷洋鯨類調査船団出港 III区一部とIV区全域で400頭±10%：水産週報 1995/11/25.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査船団が出港：NEWS『海の幸』1995/11.

京きな魚（編集後記）

関係の方々の暖かいご支持を頂いて、長崎福三理事長の勇退に伴い、理事会によって選出されて、12月1日から理事長に就任した。現在、責任の重さを両肩にずっしりと感じている。初代理事長は故池田郁夫博士であり、私で3代目となる。この欄を借用して、本誌の読者の皆様に挨拶代わりに日頃の所感の一端を述べさせて頂きたい。

当研究所職員への理事長就任の挨拶の中で、私は「官界、業界、学界、そして世界から頼りにされる研究所」をモットーとして、新たな捕鯨の創造に向けて、科学面を担当して行政を支援し、当研究所の発展のために、全力を尽くす所存である」と述べた。

当(財)日本鯨類研究所は1947年に設立された(財)鯨類研究所を母体として、商業捕鯨のモラトリウムが実施に移された1987年の10月30日付けで、農林水産省指令により設立が許可され、すでに8年が経過した。その間に政府の懇切なる指導を頂きながら、研究所の役員、職員が丸丸となって、捕獲調査事業を中心に、種々の事業の推進に頑張っており、基礎を築き、発展させてきた。

野生生物である鯨類資源を含む自然の保護と利用においては、それに直接関係する国民が存在し、国民に対して自然の保護と利用について取締り、指導する行政当局があり、自然を研究する科学者が存在し、それら自然、国民、行政、研究は相互に深く関係して機能している。

国民は自然によって利益と被害を受ける。それとは逆に、国民はそれらを含む人間活動によって自然に影響を与える。行政は自然からの利益、被害、自然への影響に関して国民を指導し、取締り、その逆に、自然との関係に関して、国民から種々の要求が行政に上げられる。自然の持つ学問的興味に刺激されて、科学者は自然を調査・研究する。しかし、科学者はそれだけでは自然の利用・保護の関係の中で存在し得ない。科学者自身は自然の利用、保護、改変に直接関与できないし、すべきでない。それを実行するのは国民であり、国民を指導するのが行政である。

科学者によって調査研究した自然に関する科学的成果を基に、自然の利用、保護、改変に関して、行政に

勧告する役割を科学者が持つ。行政はそれを受けて、さらに社会・経済的な側面からの検討を加えるとともに、国民の要求を配慮して検討し、決定して国民の自然との関係について指導し、取り締まる。

行政は科学者に対して、行政上必要な自然の調査研究を要求するとともに、調査研究に必要な人員と資金を確保する役割を担う。国民は自然の調査研究に関して科学者に期待を寄せ、科学者は得られた知識をもって国民を啓蒙する。

自然の一部である野生生物の保護・管理に当たっても、科学者はそれらを調査研究するだけでは完結せず、自分の置かれている科学者としての位置を自覚するとともに、自然、国民、行政との相互関係を十分に踏まえた行動をする必要がある。科学者はこの心構えを確立していないと、野生生物の保護・管理のための調査研究の正しい道を見失うことになる。

当研究所は研究所としての自らの位置を明確に把握し、分をわきまえて、行政と国民とから頼りにされる研究所になるべく、今後も調査・研究業務の指導に精進して行きたいと念じている。

我々はIWCによる商業捕鯨のモラトリウムは科学的根拠のない全く政治的決定であると主張してきた。そして、反捕鯨勢力による種々の妨害にもかかわらず、捕鯨の再開のステップは着実に進んでいる。我々は決してこれまで通りの商業捕鯨の復活を目指してはいない。そうではなく、新たな捕鯨の創造を目指している。今後の捕鯨は1992年のUNCEDで世界共通の概念となった生物資源の持続的開発・利用の原則に立脚したものであるべきである。当研究所は上に述べた自らの位置に立脚し、行政が非常な努力を傾注して推進している海洋生物資源の合理的利用と管理の実現のために、科学的側面からお手伝いをさせて頂きたいと願っている。

国の内外ともに激動した1995年が間もなく終わろうとしている。来年は皆様にとってよい年であることをお祈りするとともに、読者の皆様の当研究所への一層のご支持とご鞭撻を強く希望する次第である。

(大隅清治)

ストランディングレコード(1995年9月~11月受付)

第388号 1995年12月

No.	種名	評数	雌	雄	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-322	ヒレゴンドウ	A	1	1	高知	土佐清水市布	940700	漂着	死亡		体長約270cm(写真中のメジャー値)	徳広幸雄	大方町役場水産商工課	新聞情報(高知950303)		7月末。剖視。
H-072	ミンクヅラ	A	1		高知	土佐清水市布	950226	漂着	死亡		体長約5m。腐敗。	徳広幸雄	大方町役場水産商工課			新聞記事(高知950303)
0-328	サメ	B	1	1	千葉	長生郡一の宮町	950305	漂着	死亡	1.41	詳細計測値有り。	伊藤春香/小山裕弘	国立科学博物館/東京大学海洋研究所	第一発見者:秋山章男(東邦大学生物学科)	骨格(発見者、国立科博に保管)	現場に埋設した後3月12日掘出し調査解体。
H-073	ニクヅラ	C	1		高知	幡多郡大方町蓬沖約600m	950313	混獲(定置網)	生存→放流(脱出)		体長約10m。	徳広幸雄	大方町役場水産商工課		無し	新聞記事(高知950510)。文献(184)。巻上げ中に網を破って自力脱出。
0-326	サメ	A	1	1	宮城	仙台市宮城野区蒲生(仙台湾)	950903	漂着	死亡	1.145	腐敗、体色は白色化。	深瀬徹	日本野鳥の会		無し	前夜に漂着したと思われる。埋設。
H-071	ミンクヅラ	A	1		石川	七尾市地内岸端魚場	950908	混獲(定置網)			体長約4.5m。	石川県水産課			DNA標本(日鯨研)	報告ではイワシクジラだが、日鯨研DNA鑑定で種を判定。
0-324	アホウドリ	A	1		沖縄	石垣市白保海岸	950928	漂着	生存→死亡		体長5-6m。	岡田正吾	ATELIER PORPOISE	新聞情報(八重山毎日950929)	頭骨(沖縄記念公園水族館)	リーフに漂着した鯨を正午ごろ発見。
0-323	ゴッコ	A	1	1	宮城	桃生郡北上町十三浜立神地内	951009	漂着	死亡	3.26	詳細計測値有り。死後漂着と思われる。	三浦悟/芳賀圭樹	宮城県石巻水産事務所		筋肉、皮(日鯨研)	埋却。
0-325	サメ	B	1	1	愛知	知多郡南知多町豊浜字坂井5-1(伊勢湾)岩場	951015	漂着	死亡	1.23	詳細計測値有り。	大池辰也/駒場昌幸	南知多ビーチランド	第一発見者:浜本伸江	頭部、胃内容、線虫(ヒレナド)、筋(三重大)、筋脂肪(愛媛大)	埋却。
0-329	サメ	B	1	1	千葉	長生郡一の宮町	951102	漂着	死亡	1.51	詳細計測値有り。	山田格	国立科学博物館	第一発見者:秋山章男(東邦大学生物学科)	骨格(発見者、国立科博に保管)	
0-327	サメ	B	1	1	愛知	蒲郡市竹島町竹島海岸(三河湾)	951111	漂着	死亡	1.61	腐敗。	大池辰也/大沼賢一	南知多ビーチランド/蒲郡市竹島水族館	第一発見者:近藤美智雄	頭部、胃内容、生殖器(ヒレナド)、筋脂肪(愛媛大)、筋(三重大)	人口海浜に漂着。尾柄部にロープが繋がれていた。埋却。
0-330	アホウドリ	B	1	1	千葉	鎌浦市部原海岸	951115	漂着	生存→死亡	5.2	体長は新聞記事による。	小島正美	毎日新聞社千葉支局	新聞情報(毎日951116)		新聞記事(千葉日報951116)。7:30AM発見時には既に砂に半分埋没。約3時間後鴨川シーワールド職員が観察時には死亡。砂浜に埋設。他報告者:斎野重夫、池井戸聡(東京消防団)。
0-331	アホウドリ	B	1	1	千葉	鴨川市江見太夫崎海岸房州大橋下	951115	漂着	死亡	4.45	腐敗。体長は新聞記事による。	池井戸聡	東京新聞千葉支局	新聞情報(千葉日報951117)		夕刻発見。他報告者:斎野重夫。

*表中の「評」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日鯨研職員が調査や写真等によって鯨種を確認した場合、Bは他の研究者の方が鯨種の判定を行った場合、Cは鯨種の判定はされていても判定者が不明で判定に疑問がある場合や、判定が不定による所が多い場合を示しています。また「雄」「雌」各欄は、澤若総数のうち雄雌が不明した数のみを記入してあります。「体長」はmで記載してあります。その他記録方法の詳細な点については、鯨研叢書6「日本沿岸のストランディングレコード(1901~1993)」をご参照下さい。

*訂正：鯨研通信第387号のストランディングレコード(1995年7月~8月受付)に掲載されましたP-013/ゴマフアザラシをP-013/アゴヒゲアザラシと訂正し、情報を以下のように変更いたします。種の判定は当初担当者の石川が静岡新聞記事から引用しましたが、伊豆三津シーパラダイスの前嶋謙次様よりアゴヒゲアザラシとのご指摘をいただき、また朝日大学の伊藤徹徳様からも、サンケイスポーツ8月24日付記事の写真より、アゴヒゲアザラシとのご訂正をいただきました。関係者の方々にはご迷惑をおかけした事をお詫びいたします。

No.	種名	評	数	雄	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
P-013	アゴヒゲアザラシ	B	1			静岡	浜松市河輪町(天竜川(河口より3.5km上流))	950823	河川迷入	生存		体長約2m(新聞記事による)	吉岡基	三重大学	新聞情報(中日950824)	無し	種名は前嶋謙次(伊豆三津シーパラダイス)及び伊藤徹徳(朝日大学)の報告による。新聞記事(静岡新聞、サンケイスポーツ)。